御調（みつぎ）の地名と山城

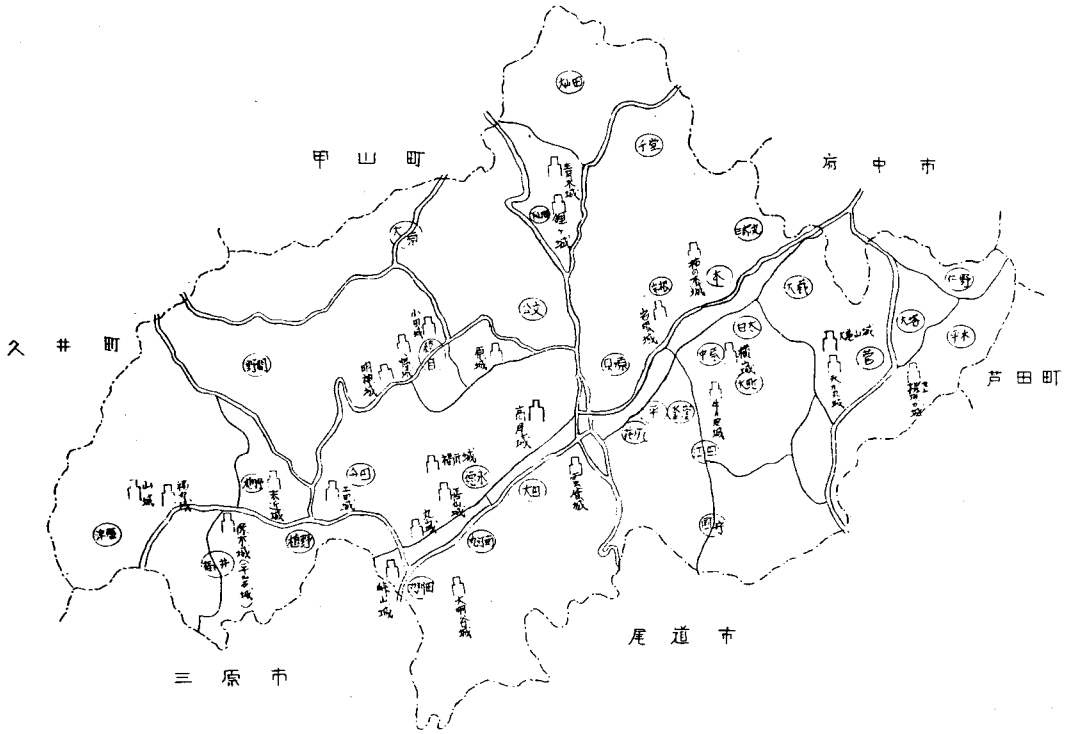
住　貞　義　量

「御調」は、その昔、水調とか三豆木あるいは三調とも表わされたが、なかなか本当の呼び方をしてもらえないのが現在も続いている。ごちょうとか、おんしらべ等とも呼ばれる。又、旅行に行って旅館の玄関に三月町とか、三木町と書かれた事もある。現在、町内の多くの人は普段はみつき町と言っている。役所や公式の場ではみつぎと呼んでいる。時折、三次と間違われる事もある。

郡名の初見は、平城宮から出土した木簡で「備後国御調郡諫山（いさやま）里」とある。「和名抄」では沼隈郡に諫山郷があるから、当時は、御調郡もかなり広かったものと思われる。

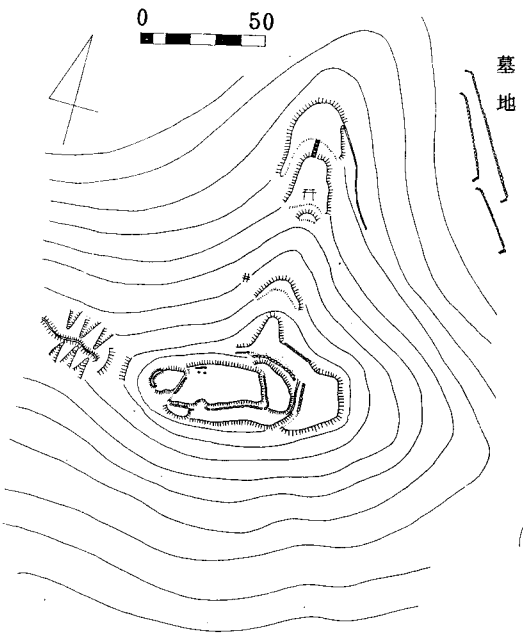
「者度」古代山陽道の１つの駅名である。これも、「いつと」とか、「いっと」等と呼ばれ、現在の甲山町宇津戸に当てる人もいる。しかし、現在の府中市から、三原市の真良に通ずるとすれば御調町の市に当てるのが妥当と思う。

御調町内には、約２５ケ所の山城が残っている。ただ開発をされていないので、ほぼそのままの状態で残っている。実地調査も昭和４８・４９年と２ケ年に亘って町教委で９ケ所を調査した程度で今後の調査が待たれている。丁度、山陽と山陰を結ぶ交通の要衝であったことや、山陰の尼子勢と毛利勢の勢力争いの禍中であったことも起因して数においては多いのではないかと思える。

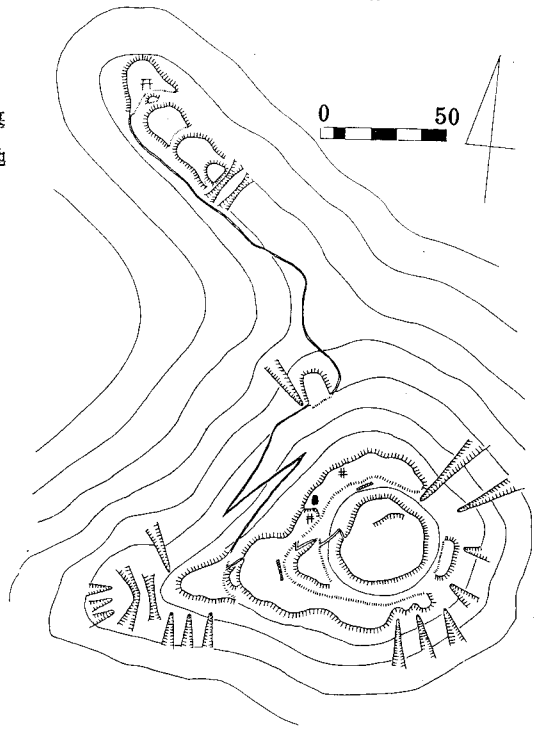


御調町山城分布図

雲雀山城跡



牛の皮城跡



町の中央部に市があり、そこに雲雀城がある。１４４３年、小早川一族である土倉対馬守夏平が築城し、この一帯をおさめている。しかし、５０年後の明応２年(1493)には三吉氏の部将、池上丹波守が入り、同年　上里周防守実秀が三次から丘城である丸山城へ入城している。こうして付近一帯は三吉一統に抑えられた。雲雀城はその後、毛利氏の防長移封に伴い、廃城となった。本城の本丸は南端部分にあたり、その南に、巾３メートル、長さ１２メートル、深さ２０メートルの空堀が構築されている。本丸の北側には二の丸が設けられ、端には土塁が築かれている。井戸址はほぼ完全なものが残っている。

池上氏の居住地であったといわれる土井ノ内、土居屋敷等が城のふもと東側にある。又市頭、市尻、上市、下市などの地名も残っている。更に池上氏の菩提寺として城の山麓に本照寺があり、その寺の背後には十数基の五輪石（池上氏の墓）がある。

町内の城の構えとして一番立派なのは、大町の牛の皮城であろう。当城は天文１３年、森光新四郎景近が築城したと伝えられている。景近は天文１３年(1544)尼子氏が三吉広隆を攻めた時広隆に加勢して功があったという。そして、同下総守近宗・同左衛門元清と続き文禄年間（1592～96）に廃城となっている。地名としては、耕地に城根、山林に二ノ丸・城山等の地名が残っている。隣の大字平には城主や森光氏その家臣の墓がある。又、市の址として二日市址がある。

丘城である丸山城（勝場山）は天正１８年（1590）に四郎三郎元実の代に落城している。三は三つの郭からなり、数段の小郭も配置されている。一部は石垣が築かれ、周囲は急崖となっており、又、城下には御調川が西側と南側を囲んでいる。このため容易には攻略出来ないようになっている。対面には、峠

撰場城跡（千羽ケ城）

三原城主小早川隆景公のいくさ目付として、三原・吉田・杭之庄より二千の兵を連れて備中高松城の支援に派遣された武将で和睦の為に同年6月4日高松城で切腹した。誠に立派な武将である。

以上町内の城の代表的なものを記したが、勉強不足の為、今後、城郭研究部会の力を借りて町内の山城についての全ぼうを明らかにしていきたい。

尚、田口副会長の協力を得て、雲雀、牛の皮城の図面を添付することができました。厚く御礼申し上げます。

（御調郡御調町本227－2）

本町で一番高い山城は大塔にある撰場場（千羽ケ場）である。随分高く海抜348メートルである。仁野の善福寺の過去帳には、嘉吉2年(1442)大道庄官藤原三郎時実築城とあり、二代しか続いておらず短期間の城であったと思われる。

末近（すえちか）城、御調町の西部に位置し、大字植野にある、所の人は末近を訛って「せじか」と言っている。「芸藩通志」によれば、末近四郎三郎の居所と記してある。末近四郎三郎はのち久井町へ居城し、天正十年(1582)備中高松城の織田・毛利の決戦に際し、毛利軍側の

釣糸を垂るるは父らしかたへにて
岸に遊ぶ子傘回しつつ

軒の燈籠の奥まで黒光り
魚商ふ路地を巡りて

春雷はしつこき冬を振り落す
ごとく轟く楠の木の上

戦争のみじめを知らぬ我が目にも
「戦」の字すらうとましく見ゆ

不足言ふ口の動きに目をやりて
ポン柑をむき袋ごと食ぶ

須磨